

所 報

No. 17

佐賀県立教育研究所

も く じ

- ・ 学校教育における学力と能力の問題について（講演要旨） (1)
- ・ 教授組織に関する研究報告 (3)
- ・ 通信簿 (4)
- ・ 理科学習における教育機器活用の効果に関する研究 (6)
- ・ 研究視察記 (7)
- ・ ひろば (8)

< 講 演 要 旨 >

学校教育における学力と能力の問題について



- ・ ほんものの「教育」を
- ・ 正答分析のすすめ

国立教育研究所 渋谷憲一先生

とき 48. 1. 11 ところ 福岡市



ほんものの「教育」を考えよう

1950年ごろから、先進諸国の学校教育が大きな変革期に立たされている。組織の問題、内容の問題、方法の問題など、そういうものが新しい教育の段階に突入しているということができる。わが国だけではなく、世界の各国が教育に関して今ほど真剣に取り組んでいるときはない。スタンフォード大学のクロムバックという心理学者は、「学校十年償却説」ということをいっている。これだけの社会の急激な変化に見合う学校教育というものを考えなければならない。十年たったら学校の全部をこわしてしまおう。そうすれば、中味も建物も教師の組織もみな新しくなる。そういう改革をいおうとしているのである。

学校教育を考える場合に、過去を省みるとともに、未来の教育に対する先取りなり、見通しなりということは今ほど言われている時はないと考える。そこで、「教育」ということを考えてみたいが、外国語をもってきてしかつめらしく教育とは

何かなどというよりは、たとえ未熟ではあっても、ひとりひとりが自分のことばで、自分の概念で教育とは何かということを考えてもらいたい。

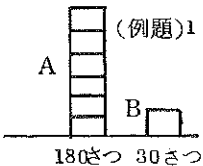
そこで、私なりに、同音異字によって考えみたわけだが、「教育」文字通り教育とは教えるということである。が、これまでの教育は教えるということに傾斜していて、受け手である子どもに対してフィードバックのない一方通行のものであったきらいがある。そうしたことをふりかえてみると、受験体制下の「競争」とも書ける。こうした手法で考えてみると、よりよい学校のエスカレートのシステムにのせようとして、学習塾に通わせるとか、ともかく一点でもよけいに勝たせようとする教育の場に子どもをおく。そうした場では、重箱のすみをほじくるような「狭育」しか行なわれない。それならまだしも、家に帰ると強制的に勉強を強いる。遊びたい欲求は無視されて、子どもにとっては脅かされて育てられる。つまり「脅育」なのである。そういう教育は「狂育」

でしかない。まだまだこうした同音異字は続くだろうが、こうした教育というものは、教えるということに傾斜したような教育の場を考えていたために陥りがちな、われわれに対する警句であると思う。

しかし、育てるという次元に立って考えた場合、こどもというものは、刻一刻成長発達しているという認識、きょう一日育っている、そういう「今日育」をわれわれの視点にもつべきである。こういう認識に立った教育を考えてほしい。今日という現在は、いまや未来が食いこんできた今日なのである。二十一世紀を生きる若い世代の教育をなしていくにも、また、創造的なこどもを育てるためにも、こどもばかりに創造的になってほしいと願ってもおとなが旧態依然とした思考方法しかもたないでは、創造的思考をめぐらせるこどもは育たない。こどもとともにわれわれも育っていかなければならない。「共育」なのである。さらに、知識の増大や専門性の分化にともなって各専門の教師が協力して教育をする「協育」でなければならない。こうした視点に立って、ほんものの教育とは何かを考えると、はじめて二十一世紀を支えていく強いこどもが育つ「強育」ということができる。よりかかり判断、借りものの概念でなくて、自分たちひとりひとりが可能性を伸ばし、可能性を信じてほんものの教育ということを考えてほしい。今日育っているこどもたちに、われわれの専門性をどう教育の中に反映していかなければならないかをひとりひとりの教師が考えてほしいと思う。

正答分析のすすめ

誤答分析ということはこれまでもやってきたし、そこで得られた情報は確かに有効な方法であった。水道方式なども綿密な誤答分析の結果、そうした考え方もできたわけだが、授業の中で誤答傾向をつかんでおくのと陥りやすい誤りがよくわか

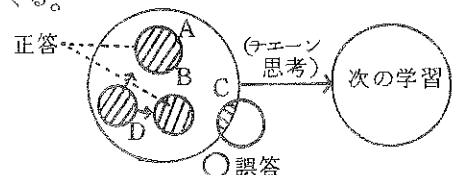


(例題)1回に5さつずつ移動して、A、B同数にするには、何回運べばよいか。ホ.
イ. $180 + 30 = 210$ ロ. $180 - 30 = 150$ ハ. $180 \div 5 = 36$ ニ. $5n + 30 = 180 - 5n$
 $210 \div 2 = 105$ ホ. $150 \div 2 = 75$ $30 \div 5 = 6$ $10n = 150$
 $180 - 105 = 75$ $75 \div 5 = 15$ $36 + 6 = 42$ $n = 15$
 $75 \div 5 = 15$ $42 \div 2 = 21$ $36 - 21 = 15$

イはならしていくやり方。ロは差に着目したやり方。ハはたばにして移していくという考え方。ニは代数的な考え方。ホは行動的なやり方である。こうしていくらも出された正答を分析してみると、そこにはいろいろな問題がある。その正答をもっと進めさせるには、われわれはいろんなモデルをもっていなければならない。多くの正答の中でどれが有力な優勢なものと考えたらいいか、ど

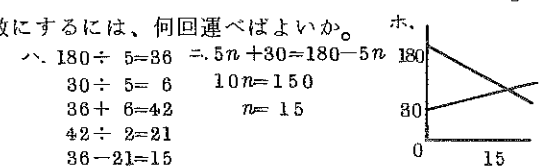
る。これからもちろん誤答分析は大切だが、正答分析をも考えなければならないと思う。これは、学力や能力にかかわってくる問題である。

いわゆる正答空間というものを考えてみると、正答空間にあるものはすべて正答として扱ってきた。ところが正答にも幾種類かの正答がある。だから多次元的な表現の中でのとらえ方が必要になってくる。



AやBはもっと他の正答空間への広がりをもつべきであるし、Cは原点移動させることによって導き入れなければならない。こういう操作が必要なのである。そして、次の正答空間へのチェーンとして、どの正答が必要であるかを明らかにし、そこへ生徒の思考を導く必要がある。つまり、こどもに軌道修正をさせていくようなことを考えなければならない。これまで誤答分析によって、誤答のこどもをどのような手だてによって正答空間へもってくればいいのかを考えたと同様に、正答空間だけのチェーンが考えられて、そういうものがこれからのほんものの学力を考えたり、その子の能力を考えていく場合の一つのモデルとして考えられなければならない。学力ということばを、もっと正答空間を考えていこうじゃないか、ということばに翻訳してもいいし、そういうことが実践的な力になるし、ほんものの教育を考えていく際のステップになるのである。

例を応用問題にとってみると、教科書の中に出されている応用問題の位置づけである。これは案外忘れられている。ある単元の中に出されている応用問題がどういうトランスファー(転移)を求めて出されているのかというようなことである。



れを高く評価すればいいのか、次の発展のためにどれをネックにしていけばいいのか、というようなことは、みな正答分析をしていかなければわからない。こうした分析によっていろいろな基礎的なデータを集め、正答分析の中味が充実してくるのである。これから創造的思考をとらえていこうとする場合にこうした正答分析がどうしても必要なことである。

教授組織に関する研究報告(抄録)

—— 県下小学校について ——

所員 江 副 三 郎

学校の教育目標が子どもの豊かな人間形成にあれば、学校経営は当然子どもの成長に役立つ組織運営を必要とする。だから学校経営は、教授・学習活動を中核とした組織的教育活動である。

現在、学校経営組織の中で、教授・学習活動を営む教授組織の現状はどうか。たとえば、1学級1人ぐらいの教員定数のわく内で、どのような望ましい教授組織が組めるのか、また組む必要があるか、特に小学校では、「1教師全教科担当」の教授システムに適合していくべきか、いくべきでないか、等は、学校規模の大小を問わず、すべての教師にかかわる教授組織の問題である。

これらの問題に関する基礎資料を得るため、6月に、県下小学校175校、および抽出校50校の先生方をお願いして調査を行なった。

以下、調査結果の一部を報告したい。

1 教授組織改善の関心や意欲は高い。

「学習指導の近代化」で最も強く感じることは「指導内容を精選し、重点的に指導する」(58%)が最も多く、「教授組織を改善する」(11%)は必ずしも多いとはいえない。過去8か年の学校の研究テーマをみると、教授組織に視点をいた共同研究は少ない。教授組織改善についての関心も「ふつう」(65%)「弱い」(13%)が現状である。しかし「学級担任が自学級を指導することをたてまえとしていることについて」-「何らかの改善が必要」(74%)「教教科を分担しあって指導するやり方(教科担当制)」-「とりいれることが必要」(84%) (以上個人の意見)であり、「学級担任制について」-「改善すべきであるという意見が強い」(48%)「改善しなくともよい」(7%)「教教科を分担しあって指導する教科担当制」-「とりいれるべきでない」(2%) (以上学校の意見)ことから、教授組織改善の関心や意欲は高いといえる。

2 「授業の共同化」の素地はできている。

「1教師全教科指導のたてまえ論」は弱まり、授業の共同化に対するいろいろな試みが行なわれている。

交換授業(62%)合同授業(38%)で教師の特技を生かし合い、専科授業(76%)奉仕授業(68%)で不得意を補っており、また授業の効率を高めるために、教材研究や計画立案、資料作成についての協力と分担の試みが、かなりの学

校で行なわれている。

このように、教授組織の改善意欲が観念のレベルにとどまらず、実際の協力活動として、とりあげられていることは重視すべきことだと考えられる。ただこのような試みが学年内(小規模校では近接学年)、教科内という組織の中での経営的試行であるかどうかを問題にしたいが、少くとも授業の共同化の素地はできているということができよう。

3 2割の学校では教科担任制やチーム、ティーチングなどを導入している。

「教師の協力的な指導体制をよりよく組織し、問題の解決をはかり、指導の効果を高める」ことについて-「すでに協力体制をしいて指導している」(22%)「関係資料を収集し、研究をしている」(9%)「職員会などで、ときおり話題にしている」(46%)「いまだ話題にさえおぼらない」(18%)のように、協力指導体制の実施状況には、レベルのちがいがあり、しかも教師個々の教授組織に対する高い改善意欲とかなりのずれがみられる。このずれはどのような理由によるものかが問題である。

4 学年会(教科部会)の機能や、学年主任(教科主任)の役割に問題がある。

校内の有益な組織として学年会、教科部会(68%)が、「指導法が参考になる」(23%)「教材研究が深まる」(29%)などの理由で支持されているながら、実際の運営では、進捗打合せ、行事等の連絡調整の協議(63%)が主としてとりあげられ、教材研究、指導計画、教材教具等の研究(30%)や準備(8%)の機能がじゅう分果たされていない現状であり、学年主任の役割は「教師相互の協力関係をつくる」(55%)が強く、学年内教師の指導助言(2%)は極めて弱い。

どのような教授組織であれ、組織の運営にあたって、学年会、教科部会の機能やスタッフのリーダーとして学年主任、教科主任の役割について考えなければならない。

「教師対ひとりひとりの子ども」という密着した中で、「子どもの活動が活発な授業」(40%)をめざし、「子どもの話合活動(36%)」を重視するなど、子ども中心の学習指導観にささえられた教授組織の見直しをしたいものである。

通信簿

所員 岩 永 憲一良

通信簿を手にした子どもたちの表情は真剣そのものである。通信簿をうけとるとすぐ廊下に出てみている子、隣の子に見えないように小開きにして見ている子、手をたたくてよるこんでいる子、失望の色を隠せない子とさまざまな表情の教室風景が見られる。この通信簿は全国ほとんどの学校で発行され、学校と家庭を結ぶたいせつな連絡簿になっている。通信簿の発行を公的に示唆したものは、明治24年といわれているので、かなり古くから発行されてきているが、内容や表示の方法は、教育の変遷をうらづけるように、かなりの変化がみられるようである。昭和44年2月テレビのモーニングショーで、通信簿の5段階評定のわくについての疑問がとりあげられてから、これを契機として全国各地で通信簿に対する関心が一段と高まってきている。家庭と学校との協力の必要から通信簿は生まれたと思われるが、その通信簿の意義として次のようなことが考えられる。

1 通信簿の意義

- ① 親に対して子どもの教育に協力を求め、学校と家庭との協力体制が密になる。
- ② 学校教育について親に理解してもらう。現代の学校教育の重点や方針等を親に理解してもらう機会になる。
- ③ 児童、生徒へのフィードバックになる。自己評価をする機会となり、今後の学習への動機づけとなる。
- ④ 教師へのフィードバック
通信簿をつけることにより、児童・生徒を深く理解する機会となるとともに、学級経営や指導法等の反省、改善に役立つ。
通信簿はこのような意義をもつが、そのための留意事項として次のようなことが考えられる。
- ① 学校教育全般についての記載であること。教科学習の成果ばかりでなく、行動、性格特別活動等についての記載であること。
- ② 分析的診断的評価であること。児童・生徒の長所や努力すべき点、進歩の状況等がよくわかること。
- ③ 記載事項が親にも子にもできるだけ理解しやすいものであること。
- ④ 学校と家庭との相互連絡をくふうすること。従来からある通信簿をみると、内容面でほとんど指導要録の内容に近いものである。指導要録と通信簿のちがいは次のとおりである。

指導要録 通信簿

- | | |
|--------------|-------------|
| a. 法定簿である。 | a. 発行は学校の自由 |
| b. 指導目的と管理目的 | b. 指導目的 |

このように両者は、はっきり性格がちがうので、指導要録そのままのタイプの通信簿は、あまり望ましくないと言えよう。とくに小学校を中心として改善の動きがみられるが、それは指導要録タイプからの脱却と言えよう。

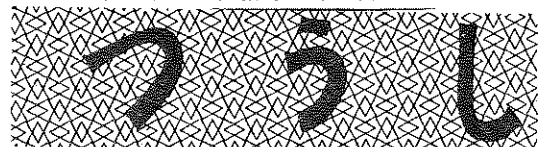
2 通信簿の改善

(1) 通信簿の新しい傾向

- ① 教科と性格行動中心から、社会的適応、個人的発達、学習態度、特活等を含める。
- ② 教科の一つの評語や点数から、分析的目標を示し、それぞれに評価する。
- ③ 全学年共通の画一的様式からそれぞれの学年に適した様式にする。
- ④ 成績の表示を、5段階の相対評価から、3段階や10段階へ、あるいは絶対評価にする。
- ⑤ 通信簿という名前を「あゆみ」のように親しみやすいものにしたたり、家庭からの連絡や教育方針や、通信簿の見方等の様式をくふうしたものなど各学校でいろいろを試みながされている。

(2) 通信簿改善にあたって

- ① 通信簿の意義を十分考慮し、全教育システムの中で、通信簿にどのような教育的意義をもたせるかを考慮する必要がある。
- ② 通信簿はある時期のまとめの評価である。改善のためには、ひごろの教育評価のあり方を十分考慮すべきで、観察指導の原理と方法を生かしたい。
- ③ 評価法の組み合わせを。
相対評価・絶対評価・個人内評価のそれぞれの長所を生かし、児童生徒を多角的にみることをたいせつであらう。
- ④ 観察項目のたて方をくふうすること。
教科の特質を考え、領域別にするか、能力概念別にするかを考える。親には領域がわかりやすいが、教科本来の目標や、通信簿の様式等との関連から困難な面もある。
- ⑤ 絶対評価の規準の客観化
相対評価では子どもの努力や進歩が表わしにくいという理由で、絶対評価に直しさえすれば改善になるとは思えない。絶対評価にする場合には、規準が教師の主観に左右されがちなので、規準の明確化をはかるために、目標の具体化や全教師の共通理解による規準の設定等客観化をはかるくふうがたいせつであらう。
- ⑥ 指導要録の評価との関連
学年末には、指導要録を完成しなければ



ならないが、通信簿と指導要録の評価の内容・方法等が異なる面については、とくに補助簿のくふうが必要であろう。

⑦ 教師の労力

通信簿の理想的なあり方と、それに要する教師の労力とのかねあいが問題である。どの程度の内容まで可能か、全教育システムの中で考えるべきであろう。

⑧ 父兄の理解と啓蒙

改善にあたっては、ひごろから親に主旨を十分理解してもらう努力と、親の気持ちも尊重すべきであろう。

このように改善にあたってはいろいろと課題があると思われるが、学校教育の方針とマッチし子どもたちのすこやかな成長を促進するにふさわしい地域の実態にあった通信簿が各学校から数多く出現することを期待してやまない。

特色ある通信簿の例

① 教科にとらわれない観点を設けたもの(小学校)

領域	観 点	1 2 3			評 価 の 場 や め や す
		1	2	3	
教科 題 の 学 習 目 的	おろついて学習しようとする				しせいがいよい 基中芳がある 私語・いたずらまじない 遊びと学習のけじめがある 他人のじやまをしない
	忘れ物をしない				程度が少ない 必要度の高いものを忘れない
	学習用具をだいににする				本・ノート・文房具をだいににする 教材教具・備品・字帳文庫をだいにせつにする 展示物・掲示物の扱いがよい
	他人の意見を正しく聞こうとする				他人の意見をじやましないでおわりまで聞く ことばじりをとらさない 連想話題を出して主眼をそらせることがない 自分と反対の意見も冷静に聞く よく挙手して発言の意思表示をする
	自分の考えを積極的に話そうとする				入まきしない ルールにしたがって話す 言いたいことを的確に表現する 疑問をもってよく質問する
わからないうことをわからうと努力する				疑問・得意・得意書でよく調べる テスト後の解答をよくおぼす	

② 学習の記録について各学年ごとに具体的な到達目標をあげているもの
この場合学年の目標項目を数多くとり、学期によって評価項目をかえるくふうをしている。斜線の欄はその学期は記入しない。
学 習 の よ う す

教科	学 習 し た こ と ・ 身 に つ い た よ う す	1	2	3
		学 期	学 期	学 期
国語	・数字が読める			
	・文章の要点をとらえながら読むことができる			
	・感情をこめて読むことができる			
	・漢字が書ける			
	・音(内容を整理して文章がわかる)			
	・話の大事なところを聞きとり、まとめることができる			
	・考えをまとめて話すことができる			
	・発音やなまりに気をつけて話せる			
	・文法(主語述語つなぎことば指示語)がわかる			
	・文字を正しく読めて書くことができる			
・ローマ字で書かれた語や、簡単な文が読める				
・大文字と小文字が書ける				

④ 1年生の1学期に特別のくふうをしているもの
第1学年1学期の例

昭和 44 年 度 1 学 期 1 年 組

ふ う し ん ぼ

墨田区立 錦糸小学校

校長

担任

・五十音が読める	<input type="text"/>	20までの数字がかける	<input type="text"/>
・五十音が書ける	<input type="text"/>	・なん時はんがわかる	<input type="text"/>
ひろい読みでなく文として読める	<input type="text"/>	正しく歌を歌える	<input type="text"/>
かんたんな文がかける	<input type="text"/>	絵を大きくのびのびと楽しくかける	<input type="text"/>
20まで数えられる	<input type="text"/>	きまりを守って運動できる	<input type="text"/>
・元気にあそぶ	<input type="text"/>	すぐ仕事にとりかかれる	<input type="text"/>
・しせいがいよい	<input type="text"/>	友だちとなかよくする	<input type="text"/>

③ 特別活動の評価の観点をくふうしたもの

領域	観 点	学 期			評 価 の 場 や め や す
		1	2	3	
特 別 活 動 会	議題に即して自分の意見を述べる				発言量が多い 内容が拡散しない 理由づけが妥当である 論旨が通っている 他人の意見もふまえながら自分の意見が発言できる 的確に要領よく発言できる
	他人の意見や立場を尊重する				他人の話をじやましないで正しく聞きとる 悪いやりをもって聞く 他人の立場になって考える 常に冷静に話すことができる
	会議のルールにしたがって話し合える				私語的な言い方をしない 適切な音量で話すことができる 指名されてから発言する 他人の発言中はあわまるまで静かに聞く 議事運営がじょうずにできる 記録がじょうずにとれる



参考図書

- ・「新指導要録、通知表記入の実際」 教育出版
- ・「新通信簿」 日本図書文化協会
- ・「通信簿の改造」 八鹿小学校
- ・「通信簿」 大阪市教育研究所 他

理科学習における教育機器活用の効果に関する研究

所員古賀信之

今年度の研究として実施したものを紙面の都合でその一部を紹介する。くわしくは3月末当研究所から出す「研究紀要」をごらんいただきたい。

I ねらい

理科教育で指向する探究的な学習について、教育機器を活用した学習プログラムを構成し、学習を内発的、主体的にし学習の定着を高める方法を実験的に究明し、指導法改善の基礎的資料を得る。

II 研究の仮説

探究の過程において、VTRを教材の提示や検証方法の計画に、またOHPを思考の集約や問題のは握及び結果のまとめに活用することにより、問題のは握、予想、検証、結論までの学習が効率的に行われ、学習の成立や定着に効果をあげることができるであろう。

III 研究の方法

- 赤松小学校5年生(4クラス)を対象者とし二クラスずつを二群法による実験的方法とする。統制群は従来通りの演示や図示をする。
- 実験授業の前後のテスト及び把持テストを行い両群のテストの結果を比較し、教育機器活用による学習の成立の効果をとらえる。
- VTRは自作し一部教育テレビを録画する。

IV 研究の内容

1 学習プログラム

- 単元 酸素と二酸化炭素(第5学年)
- 実験計画

指導者	二群	第1時	第2時	第3時	第4時
		燃焼によるCO ₂ の発生	CO ₂ の製法	CO ₂ は空気より重い	CO ₂ は水に溶ける
A	実験群(I)	VTR・OHP	VTR・OHP	OHP	OHP
	統制群(I)	演示・図示	全左	図示	全左
B	実験群(II)	OHP	OHP	VTR・OHP	VTR・OHP
	統制群(II)	図示	全左	演示・図示	全左

- 指導案(略)
- VTR・OHPの内容

- OHP(略)
- VTR(1例)

- 大小びん中のろうそくの火の比較(提示)
- 燃焼後のびんの中の空気の検証(検証)
- 二つのびんに入れた石灰水の白濁の違い(提示)
- 水管中の空気とCO₂の変化比較(提示)

2 結果についての考察

- 実験群(VTR・OHP)と統制群との比較
 - o 学習の成立(事前と事後の有効度指数)

(第1時~第2時)		(第3時~第4時)	
実験群(I)	統制群(I)	実験群(II)	統制群(II)
47.9%	37.5%	55.5%	45.7%

o 学習の定着(事前と把持の有効度指数)

(第1時~第2時)		(第3時~第4時)	
実験群(I)	統制群(I)	実験群(II)	統制群(II)
54.4%	29.5%	58.1%	42.9%

この表は各問題ごとの有効度指数を平均したものであるが、事後テストにおいても学習1ヶ月後の把持テストについても実験群の方がすぐれている。把持テストが事後テストと比べ落ちているのは忘却があつたためで、伸びているのは興味・関心が持続し、復習その他により学習がなされたためではないかと思われる。

イ. 反応類型による比較

第1時~第2時		VTR・OHP	演示・図示	OHP	図示	
事前	事後	型	実験群(I)	統制群(I)	実験群(II)	統制群(II)
○	○	a	29.3%	27.3%	31.0%	34.4%
×	×	b	32.8	42.2	26.9	33.7
×	○	c	31.8	25.6	36.7	24.2
○	×	d	6.1	4.9	5.4	7.7
$\frac{c}{b+c} \times 100$			49.2	37.8	57.7	41.8

この表はテスト問題を反応型別にみたものの一で、×○型が学習が成立したものである。この結果は実験群が良かったことを示しているが、また情報提示機器を多く使った方が必ずしも良いとばかりいえないようである。そこで内容と位置づけの点からみたのが次の表である。

ウ. 学習内容と機器の位置づけによる効果

問題内容	観点			主として関係あると思われる機器	実験群(I)	統制群(II)
	知識	理解	技能			
1 びんの中の火の消え方	○			VTR	100%	100%
2 そのわけ		○		OHP	30.3	30.3
3 びんの大小と中の火の消え方	○			VTR	48.5	50.0
4 そのわけ		○		OHP	35.5	30.8
5 火が消えたびん中の気体の存否			○	VTR OHP	0	12.2
6 実験のどこでわかるか			○	OHP	12.8	12.5
7 石灰水を白濁させた気体は		○		OHP	70.8	47.7
8 石灰水の白濁の差異とCO ₂ の量			○	VTR OHP	37.9	22.2
9 CO ₂ 発生装置の良否			○	OHP	77.3	35.4
10 CO ₂ 発生法	○			OHP	71.8	34.1

上の表もデータの一部なのでこの表からはつきりはいえないが、全体からは理解思考の面で有効であつたと思われる。

V 反省

- o 自作のVTRで親近感をもち意欲的学習がなされた。事実の提示がVTRにより時間が短縮され、焦点化し学習の成立に効果があつた。OHPの提示技法により思考が深まった。

鹿児島県教育センター視察記

(847.12.8~9日)

唐津西高等学校 川 添 一

北明小学校長 黒木教善

昨夜の雨に洗われた哈良火山地のシラス台地もみごとに晴れわたって、初冬の木々や、黒い火山灰地の景観もあざやかに目にうつってくる。西鹿児島駅からバスで40分ぐらいのところ一鹿児島郡吉田村宮浦にセンターはある。まさに静寂の地にあり、270mの海拔から遠望する桜島の間歇的噴煙が、研修される先生方へ、教育への情熱をかきたてるような迫力と内省の環境である。桐野所長の話される“美”の世界の理念のように67,000㎡の敷地には、哲学の道600mの落葉の音以外には、塵一つない芝生と所員89名によって清められた環境整備の実があげられていた。広大な土地も多くの備品も、学ぶ人びとの心のおきかたによることを今さら感じたのである。

説明や指導された所員の方々の対応は、“善”なるものへの志向として、実に親切そのものであって、1日半の話し合いの中に研修とは、人と人と心の心からの結びつきであることをサービス=善として指導される態度がうかがわれた。

研修はすべて“純粹である”との発想が、“真”への追求を研修の基本におき、その表われとして、短期研修(1日~6日)、長期研修(半年)も全部先生方の「希望制」であることで、割当制でない。講座内容の設定も、各関係の意見をもとに3月に決定し、応募者も短期定員8,000名、長期30~38名に対し数倍になっている現状で、一人で数回も希望される先生もあるとのことである。また自主研修者2,000名もある。行政的政策的管理制でなく、学問研修の目的を生かすために、センターが中心となって企画・運営しており、単なる集会場、娯楽場としての貸与はせず、あくまで所員の方と、国・社・教・理・英の各教科・経営・へき地小規模・教育相談・図書資料等の主題について研修に没頭することになっている。現在芸術・技術家庭・保体・情報科関係は将来の企画になっているが、所員先生の人員不足による多忙さと増員を願われるのも、こうした研修の意欲にあらう。講座の例をあげると、社会(18世紀フランスの社会思想、地理教材として台地・低地の土地利用に関する研究)のようなものである。また研修をしたいとの希望が多いところに研修の効果が実現していることを感じ、広大な環境、熱意ある所員先生の意欲、多数の現場先生の希望の現状と併せ、佐賀県教育センター(仮称)のより一層の充実・発展を祈る次第です。

—もう一度教育佐賀へ—

地図でみた鹿児島県教育センターの位置は山の中である。このセンターを視察せよとの命をうけて、同行18名と共に西鹿児島をバスで出発した。いなか道を通り山道を走ると約40分で吉田村につく。ここに教育センターがある。

ところが着いて驚いたことは、そのいなかに教育研修の殿堂が、桜島を前面に夢のような広大さで設立されているのである。鉄筋の近代建築の棟々、芝生の美、約2万坪の敷地の広大さに、私は完全に魅了されてしまった。そしてこのような環境から教育の叡智は生れるとの感を深くした。

佐賀が教育県という名は夢語りとは思ってはいたものの、まだ命脈はあると慰めていたが、これを見て完全にダウンである。

教育センターという教育機関の設置のない県は九州では佐賀県のみと聞いていたが、すくなくとも鹿児島県に類するものが各県に設置されているとすれば、既に佐賀県は遅れをとって、教育レベルをぐんぐん追い抜かれていく現状ではないだろうか。かつて各県に教育研究所というものが設置された時代に、佐賀県も昭和27年にささやかなる発足をして今日に至ったが、これも全国レベルから見ると小さかった。研究部門に力を入れる県には教育思慕の深い心を感じさせられる。佐賀県も弱小県とはいえ、これだけはという何物かが出てこないのであろうか。

鹿児島の場合、教育研修のためにセンターの利用者は年間6000名と大きく、教職が専門職である以上は研修はその生命である。年々これだけの人数が、自主的に計画的に研修されていく実状は頼もしくもあり、うらやましい限りである。

広大な建物や敷地、及び内容はすべて透徹した純粹教育理念の中で運営されていたことも感じ入った。真善美の具現を期し、建物の構造敷地からくる美、学問の道の探究としての真、職員の本心からなる研修者への善意の表現、まさに純粹教育哲理の具現である。鹿児島県は10万坪にわたる広大な青少年センターも併せもち、小学校の時代から伸びる場を提供しているが、これも見せてもらった。教育思慕への気宇まさに広大である。

このような構想の中に日々進歩しつつある他県の状況を見て、ここに教育佐賀の一大奮起を願わねばならない。教育の投資は直ちに効果は出ないだろうが、永い目で積みあげたいものである。

み て あ る 記



